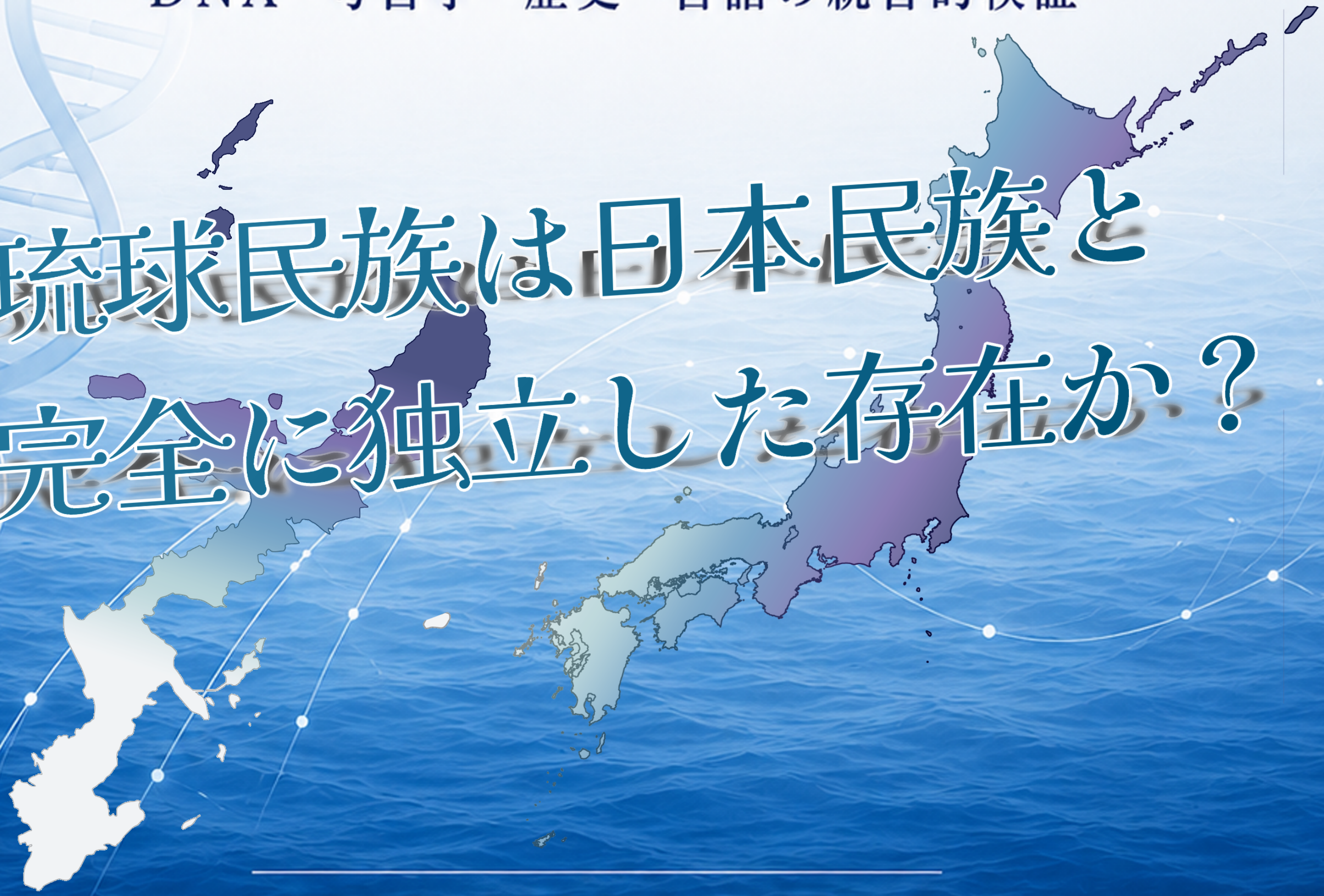
学術的資料群を精読

琉球人と本土日本人の関係に関する総合評価

DNA・考古学・歴史・言語の統合的検証



琉球民族は日本民族と完全に独立した存在か？

- 複数分野の資料を統合した客観的評価
- 事実と推論を明確に区別
- 学術的根拠に基づく公正な検証

学術的観点から見た琉球民族と日本民族の評価

結論

各種資料を総合すると、「**日本列島人との連続性**」と「**地域的独自性**」**は両立する**ことが支持される。

一方、「**琉球民族は日本民族ではない**」**と断定するだけの根拠は、調査した資料からは得られない。**

評価に用いた資料

本資料は、琉球列島集団の起源や民族性を評価するために、考古学・人類史・遺伝学・比較言語学・歴史資料など、関連する主要分野の資料を調査したうえで作成した。資料は、**特定の結論を支持または否定する目的で恣意的に選択したものではなく、**各分野において本命題の評価に直接関係する資料を採用している。

- **資料A**：琉球弧の考古学（旧石器・縄文・人流）
- **資料B**：ヤポネシア論（日本列島人形成史）
- **資料C**：第二尚氏第23代当主・尚衛氏による公式発言（王家に伝承された歴史認識）
- **資料D**：琉球国王・琉球王国史（歴史事項の整理）
- **資料E**：琉球大学 全ゲノム解析（2023年）
- **資料F**：琉球諸語・日本語族（比較言語学）

本資料では、**資料A・B・C・Eを主要な評価根拠**とし、**資料D・Fは歴史事項および言語分類の整理・確認を目的とした補助資料**として使用した。資料から直接支持される事項と、複数資料を統合して導かれる推論を明確に区別して記載している。

また、全資料は最終ページにて参考文献として明示している。

各評価項目

評価項目	資料A～Fから直接支持される事項	評価
遺伝 (B・E)	• 琉球人と本土日本人は共通祖先を持つ。 • 琉球人は縄文系統割合が本土日本人より高い。 • 弥生～グスク時代までに本土系との遺伝的交雑が確認される。	日本列島集団との**強い連続性**を支持。
考古学 (A・B)	• 琉球弧では旧石器時代から人類が定住。 • 琉球弧→日本方向の交流が示される。 • 弥生以降は本土との交流が拡大。	日本列島との交流を経ながら 地域的特徴を形成。
言語 (F)	• 琉球諸語は日本語族に分類される。 • 日本語と共通祖語から分岐した姉妹言語。	言語系統は 日本語との**共通起源**を支持。

評価項目	資料A〜Fから直接支持される事項	評価
文化 (A・D)	• 独自の文化・宗教・習俗を形成。 • 琉球王国として独自の政治・外交制度を発展。	**地域的独自性**を支持。
歴史認識 (C)	• 第二尚氏王家には、日本との歴史的連続性を示す伝承がある。	王家に伝承された 歴史認識として評価できる。
総合評価	**資料A〜Fを総合すると、「日本列島人との連続性」と「地域的独自性」は両立している。** そのため、**「琉球民族は日本民族ではない」と断定するだけの根拠は、資料A〜Fからは得られない。**	

評価の考え方

- 遺伝・考古学・言語・文化・歴史・自己認識を総合して評価した。
- 文化や言語のみを理由として民族を断定していない。
- 資料A〜Fから直接支持される事項を重視した。

DNA解析と考古学的人流

資料E（全ゲノム解析）と、 資料A（琉球弧の考古学）・ 資料B（ヤポネシア論） を統合して、人流の変遷を整理した。

人流・DNA解析の統合評価（資料A・B・E）

資料A（琉球弧の考古学）、資料B（ヤポネシア論）、資料E（琉球大学 全ゲノム解析）を統合し、 琉球列島集団の形成過程を時系列で整理した。

時代	考古学・歴史（A・B）	DNA解析（E）	統合評価
旧石器〜縄文	• 琉球弧では旧石器時代から人類が居住。 • 黒潮航海を背景とした琉球弧→日本方向の交流が示される。 • 日本→琉球方向の継続的人流はほぼ認められない。	• 縄文系統が主要構成要素。	琉球列島集団は比較的独立して形成され、 縄文系統を強く保持した時期。
弥生〜グスク時代 （琉球王国成立前）	• 本土との交流が徐々に拡大。	• 本土系との遺伝的交雑が既に確認される。 • 現代琉球人につながる祖先集団が形成される。	この時期までに、 日本列島集団との遺伝的交流が成立していたことが支持される。
琉球王国 〜薩摩侵攻	• 交易・外交が活発化。 • 日本との人的交流も継続。	資料Eでは この時代を個別には解析していない。	歴史資料から人的交流は確認されるが、 DNA解析による年代別評価は示されていない。
薩摩侵攻後 〜琉球処分	• 薩摩支配下で日本との交流が継続。	資料Eでは この時代を個別には解析していない。	人的交流は確認される。 遺伝的交流については、 歴史資料との統合による推論が必要となる。
日本統合後 〜現代	• 日本国内の人口移動が一般化。 • 地域間交流が日常化。	• 現代琉球人は本土日本人と共通祖先を持つ。 • 縄文系統割合は本土より高い。	現代琉球人は、 日本列島人との強い連続性を持ちながら、 地域的特徴を保持する集団として評価される。

資料A・B・Eから直接支持される事項

- 旧石器〜縄文期は、琉球弧→日本方向の交流が主に示され、日本→琉球方向の継続的人流はほぼ認められない（A）。
- 弥生〜グスク時代までには、本土系との遺伝的交雑が既に成立していた（E）。
- 現代琉球人は本土日本人と共通祖先を持ち、縄文系統割合がより高い地域集団である（B・E）。

本表に含まれる推論

- 薩摩侵攻後も人的交流が継続したことから、遺伝的交流も一定程度継続したと考えられる。ただし、これは資料Dと資料Eを統合した推論であり、資料Eが年代別に直接示した結果ではない。

総合評価

- 旧石器〜縄文では、琉球弧→日本方向の交流が考古学的に示される。
- 同時期、日本→琉球方向の継続的人流はほぼ認められない。
- 弥生〜グスク時代には、本土系との遺伝的交雑が既に確認される。
- 以後も歴史的交流を経て現代集団が形成された。

民族を構成する要素の総合評価

民族は一つの要素だけで決定されるものではなく、 複数の学術分野を総合して評価される。

民族を構成する要素の総合評価

民族は一般に、 **遺伝・言語・文化・歴史・自己認識** など複数の要素を総合して評価される。 本表では、資料A～Fから直接支持される事項を整理し、 総合評価を行う。

評価要素	資料A～Fから直接支持される事項	学術的評価
人種・DNA （B・E）	• 本土日本人と共通祖先を持つ。 • 縄文系統割合は本土日本人より高い。 • 弥生～グスク時代までに本土系との交雑が認められる。	日本列島集団との **遺伝的連続性** を支持する。
考古学 （A・B）	• 旧石器時代から琉球弧に人類が居住。 • 琉球弧→日本方向の交流が示される。 • 弥生以降は本土との交流が拡大する。	独立した起源ではなく、 日本列島との交流を経て形成された地域集団と評価できる。
言語 （F）	• 琉球諸語は日本語族に属する。 • 日本語とは共通祖語から分岐した姉妹言語とされる。	日本語との **共通系統** を支持する。
文化・歴史 （A・D）	• 独自の文化・宗教・習俗を形成。 • 琉球王国として独自の政治・外交制度を発展。 • 冊封・薩摩支配・琉球処分など独自の歴史を持つ。	**地域文化としての独自性** を支持する。 文化的独自性のみでは、 民族的断絶は導けない。
集団の歴史認識 （C）	• 第二尚氏王家には、日本との歴史的連続性を示す伝承がある。 • 王家に伝承された歴史認識を示す史料として評価できる。	王家の歴史認識を示す史料として 一定の史料価値を有する。 住民全体の認識とは区別して扱う必要があるが、 根拠なく史料価値を否定することも適切ではない。
総合評価	**資料A～Fを総合すると、** • **遺伝・考古学・言語は、日本列島人との連続性を支持する。** • **文化・歴史は、地域的独自性を支持する。** • **王家には、日本との歴史的連続性を示す伝承が存在する。** **したがって、 資料A～Fの範囲では、 一つの要素のみを理由として 「琉球民族は日本民族ではない」 と断定することは学術的に適切とは言えない。**	

評価上の注意

- 言語系統は民族を直接決定するものではなく、民族形成を評価する一要素である（F）。

- 文化的独自性のみを理由として、民族的連続性を否定することはできない。
- 第二尚氏王家末裔の証言は、王家に伝承された歴史認識を示す史料として評価し、その史料価値を根拠なく否定しない。

総合評価

資料A〜Fを総合すると、 DNA・考古学・言語は 日本列島人との連続性を支持し、 文化・歴史は 地域的独自性を示している。

また、 第二尚氏王家末裔による証言は、 **王家に伝承された歴史認識** を示す史料として評価できる。

したがって、 **一つの要素のみを理由として 「別民族」と断定することは 資料A〜Fの範囲では適切とは言えない。**

出典・評価方針・推論事項

参考文献・評価方針・推論事項

> **参考文献について**
>
> 本資料は、依頼により指定された資料A〜Fを評価対象として作成した。 **資料A・B・C・Eを主たる評価根拠と**し、 **資料D・F（Wikipedia）は、歴史事項・言語分類の整理および確認を目的とした補助資料** として使用した。本資料の結論は、Wikipediaのみを根拠として導いたものではない。

主要評価資料

1. **資料A　琉球弧の考古学**
   「人とモノの移動の考古学 — 琉球弧」
   https://ac.jpn.org/kuroshio/hitomono/index.htm
2. **資料B　ヤポネシア論**
   『ヤポネシア — 日本列島人の形成史』紹介記事（講談社 現代ビジネス）
   https://gendai.media/articles/-/90477
3. **資料C　第二尚氏末裔・尚衛氏**
   産経新聞（2025年5月26日）
   第二尚氏末裔・尚衛氏へのインタビュー記事
   https://www.sankei.com/article/20250526-R2NTELTIA5D3DG2CPK7NWA7LXM/
4. **資料E　琉球大学 全ゲノム解析（2023）**
   琉球大学 プレスリリース
   https://www.u-ryukyu.ac.jp/news/47334/

   論文（PDF）
   https://www.u-ryukyu.ac.jp/wp-content/uploads/2023/07/5e63a25e7836386789e17d1c9d4b979b.pdf

補助資料

5. **資料D　琉球国王**
   Wikipedia「琉球国王」
   （王統・冊封・薩摩支配・琉球処分等の歴史事項整理に使用）
   https://ja.wikipedia.org/wiki/琉球国王
6. **資料F　琉球諸語**
   Wikipedia「琉球諸語」
   （日本語族・比較言語学上の分類整理に使用）
   https://ja.wikipedia.org/wiki/琉球諸語

本資料の評価方針

- 指定された資料A〜Fを主たる根拠として整理した。
- 資料から**直接支持される事項**と、複数資料を統合して導かれる**推論**を明確に区別した。
- 資料外の一般論や既有知識によって結論を補強・修正していない。
- 文化・言語・歴史など、単一要素のみを理由として民族を評価していない。
- 第二尚氏王家末裔・尚衛氏の証言は、**王家に伝承された歴史認識を示す史料**として評価し、住民全体の認識とは区別して扱った。

本資料に含まれる推論

- **薩摩侵攻後の遺伝的交流**
  資料Eでは弥生〜グスク時代までに本土系との遺伝的交雑が成立していたことが示されているが、 薩摩侵攻後を個別年代として解析した結果は示されていない。 一方、資料Dでは薩摩支配以降も日本との人的交流が継続したことが整理されている。 そのため、 「**人的交流が継続した以上、遺伝的交流も一定程度継続したと考えられる**」 という記述は、 資料Dと資料Eを統合した合理的推論であり、 資料Eが直接示した結果ではない。

- **民族の総合評価**
  民族は一般に、
  - 遺伝
  - 考古学
  - 言語
  - 文化
  - 歴史
  - 自己認識

  など複数要素から評価される。 本資料では資料A〜Fを総合した結果として、 「**日本列島人との連続性**」と「**地域的独自性**」**は両立しており**、 **資料A〜Fのみから 『琉球民族は日本民族ではない』 と断定する根拠は十分ではない** と評価した。 これは複数資料を統合した総合評価であり、 単一資料が直接述べる結論ではない。

資料A〜Fから直接支持される事項

- 琉球人と本土日本人は共通祖先を持つ（資料B・E）。
- 琉球人は本土日本人より縄文系統割合が高い（資料E）。
- 弥生〜グスク時代までに本土系との遺伝的交雑が認められる（資料E）。
- 旧石器〜縄文期には、琉球弧→日本方向の交流が示され、日本→琉球方向の継続的人流はほぼ認められない（資料A）。
- 琉球諸語は日本語族に属し、日本語と共通祖語から分岐した姉妹言語とされる（資料F）。
- 琉球文化・琉球王国には地域的独自性が認められる（資料A・D）。
- 第二尚氏王家には、日本との歴史的連続性を示す伝承が存在する（資料C）。
  - **資料C　第二尚氏末裔・尚衛氏**
    産経新聞（2025年5月26日）
    「戦後80年・沖縄県祖国復帰53周年記念祭典」における 第二尚氏第23代当主・尚衛氏の発言を報じた記事
    https://www.sankei.com/article/20250526-R2NTELTIA5D3DG2CPK7NWA7LXM/

注記
本資料は、指定された資料A〜Fを主たる評価対象として作成した学術的要約である。 事実と推論を明確に区別し、資料外の一般論による結論の補強・修正は行っていない。 また、補助資料として用いたWikipediaは、歴史事項および言語分類の整理・確認を目的として参照したものであり、結論の主要根拠とはしていない。

評価方針

- 資料A〜Fを主たる根拠として整理した。
- 資料から直接支持される事項と、統合による推論を区別した。
- 資料外の一般論によって結論を補正していない。

本資料に含まれる推論

- 資料Eは薩摩侵攻後を個別には解析していない。 一方、資料Dでは薩摩支配以降も人的交流が継続したことが示される。 **このため、「人的交流が継続した以上、遺伝的交流も一定程度継続した」とする部分は、 歴史資料とDNA解析を統合した推論である。**
- 「民族は複数要素から評価されるため、一要素のみで別民族と断定することは適切ではない」 という総合評価は、 資料A〜Fを統合した評価である。

資料A〜Fから直接支持される事項

- 琉球人と本土日本人は共通祖先を持つ（B・E）
- 琉球人は縄文系統割合が本土より高い（E）
- 弥生〜グスク時代までに本土系との遺伝的交雑が認められる（E）
- 琉球諸語は日本語族に属する（F）
- 琉球文化・琉球王国には独自性がある（A・D）
- 第二尚氏王家には日本との歴史的連続性を示す伝承がある（C）
    - なお、第二尚氏第23代当主・尚衛氏は、「戦後80年・沖縄県祖国復帰53周年記念祭典」という公的な場において、「沖縄の人々のDNAを紐解くと、先住民族ではない。日本人だ」と述べた。資料Cは、この発言を報じた史料であり、少なくとも王家に伝承された歴史認識および当主の公式な歴史認識を示す資料として評価できる。

本資料は、指定された資料A〜Fのみを主たる根拠として整理したものであり、 事実と推論を区別して記載している。